2016. 9. 26 長野日報

お茶の水女子大学附属高校の生徒からの投稿 ⑥

5月にお茶の水女子大学附属高校の生徒たちが学年合宿で諏訪地方を訪問した。生徒たちから寄せられた投稿を紹介する。

伝統を守る

高杉真由香

先日、私たちは学年の親睦を深めるとともに、フィールドワークを行うため、諏訪で合宿を行いました。高原蜂蜜を食べてみたり、温泉に入ったり、味噌作りに挑戦してみたりと様々な活動をしました。

その中でも諏訪大社を訪れた際に見た御柱が特に印象に残りました。ちょうど御柱祭が終わったばかりで、新しくたてられたばかりの御柱を見ることができました。実際に見てみると、想像していたよりもかなり大きく、太かったので、とても驚きました。また御柱を見ている時、私の横にいた方が、御柱に両手を当てて願い事をしたり、パワーを感じたりしていました。その人になって私もやってみましたが、本当に御柱から何か神聖な力が出てきているように感じられました。神様が宿る大きな御柱によって温かく見守られている感じがとてもしたことから、諏訪での御柱の存在の大きさを感じさせられました。

昔も今も続けられている「御柱」の伝統は大変だとは思いますが、諏訪の人を団結させるすばらしい伝統なので続けてもらえると嬉しいです。

人工の道

小川　黎

私は学校の合宿の中で八島湿原に行きました。八島湿原には木造の遊歩道がかかり、その上を歩くことができました。遊歩道は二本に分かれており、その間から光が入って遊歩道の下にも植物が育つことで、降雨で土が湿原に流れるのを防いでいます。この遊歩道ができるまでにはたくさんの時間がかかったそうです。初めは一枚の木の板を地面に置くだけ。その後に地面から離れる形になり、最終的に今の形になりました。私たちが何も考えずに歩いている遊歩道にはたくさんの人たちの汗と知恵がつまっていたのです。遊歩道だけでなく、私たちが普段使っている物全て、誰かの手によって生み出されています。そして、それらの多くは植物を原料として使っています。私たちは自然に生かされ、人間に生かされ、そしてお互いを守ることで平和に暮らすことができています。そんな当たり前のことに初めて気がつきました。

一つの町としての一体感

尹　蒼夜子

私は、五月、学年合宿として諏訪を訪れました。そして、諏訪で感じたのは東京にはない「一つの町としての一体感」でした。

二日目、私たちは班ごとに御田町商店街でインタビューを行ったのですが、どこのお店でも、共通して御田町の歴史や良さを聞きました。どのお店も御田町とともにある、ともに歩くのだということが伝わりました。また、近所に住む人が何処から来たのか、何をしている人なのかなどはお互いに関わりを持たないと知ることができません。それを当たり前のように話してくれた御田町の方々は、まるで一つの家族のようだな、と思いました。

もう一つ、私たちが諏訪を訪れたのは天下の大祭、御柱祭の直後でした。お土産屋さんや商店街でもたくさんの御柱祭グッズがあり、お祭りの様子を話してくれる方もいました。それこそ「町が一つになって」行うお祭りなのだな、と思いました。七年後、いつか御柱祭を見にまた諏訪に訪れたいと思いました。

繋がっていく歴史

酒井ひのき

諏訪という町はなんと情味に溢れた町なのだろう。初めて諏訪を訪れてみて、私はそう思った。明らかによそ者の私たちにもとても優しく接してくださった下諏訪の商店街の方々。その「よそ者を取り込もうとする姿勢」に、この町が続いている理由がある。

下諏訪に来てもらい、その魅力を知ることで、何十年先かに商店街に人が訪れる。目先の利益にとらわれずに、お客さんに全力でサービスすることで、これから先も続いていく町になる。この戦略は、諏訪の人たちの、諏訪を想う気持ちからきたものだろう。そして全力で商いをする人たちをみて、とても感銘を受けた。全くそんなことはないのに、私の地元のように感じられた。とても居心地が良いこの町に、また来たいと思った。そんな私は、すっかり諏訪の人々の術中にはまっているのだと思う。

鹿との共存

椎葉　万智

私は先日、学校の合宿で八島湿原を訪れた。ネイチャーガイドさんのお話で一番気になったのは、鹿柵のことだ。湿原に鹿が入り、環境を壊してしまうのを防ぐために、湿原のまわりにはグルッと高い柵がつくられているそうだ。しかし、私がそこで思ったのは、鹿だって自然の一部であるし、人間が勝手に鉄製の柵を作ったら、それこそ環境を壊してしまうのではないかということだ。実際に、湿原は現在、だんだん森になっているそうだ。森になっていることは悪いわけではない。だが、人間が手を加えることによって環境が変わってしまうということは覚えておきたい。

現在、湿原だけではなく、様々な場所で環境破壊は問題になっている。そこには人間の勝手な行動によるものが多いと思う。それらを変えていくために、まずは、今回訪れた八島湿原から変えていきたい。八島湿原から、鉄柵をなくし、本当の意味で鹿と共存できる方法をこれから考えていきたい。

おカイコさま

土井　瑠璃乃

私たちは合宿最終日、岡谷蚕糸博物館を訪れた。展示室内には製糸全盛期の頃の工場や工女さんたちの写真、江戸時代から昭和時代までの製糸機械などがずらりと並んでいる。蚕と触れ合える部屋もあった。日本の産業を発展させた原点なのかと思うと、ゆっくりと桑の葉を食べる小さな虫がとても大きい存在に感じられた。また、今は精密機械や自動車など、私には仕組みも理解できないような産業が多いけれど、それらの元が全て蚕なのだと思うと、難しい産業を少し身近に感じた。

蚕には羽があるが飛ぶことができない。糸を作るために改良されたのだという。しかし蚕はその代わりに、日本の産業に大きな「製糸業」という羽をつけ、海外の国に負けないくらい高く強く羽ばたかせてくれた。

今ある社会も、小さな虫に支えられていた。

「おカイコさま」に深く感謝したい。